



都市文化研究センター (UCRC) の活動の概要と運営委員会

草生久嗣 (文学研究科准教授, UCRC 副所長)

1. 活動の概要

都市文化研究センター (Urban-Culture Research Center; UCRC) は大阪市立大学大学院文学研究科内において研究・教育を支援し、関連諸事業を牽引するために設置されたものである (開設 2007 年)。文学研究科専任教員, UCRC 研究員, 特別研究員 (UCRC 研究員と兼任可) によって構成され, 所属する大学院生, 若手研究者へ研究活動に対する経済的・機会的支援や, その国際的な発信に向けた援助に重点的にとりくんでいる。本センターは, そうした活動を, 学内外の競争的資金を継続的に獲得することで行っており, 今年度にもいくつかその採択および成果を得た。なかでも継続中の日本学術振興会の事業「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業 (旧頭脳循環プログラム)」は, これまで文学研究科が豊かに構築してきた国際的ネットワークを十全に活用する機会となり, 次世代の専門家養成に資するものなることが期待される。

また, 昨年度に引き続き, 学内競争的資金が獲得され「戦略的研究 (基盤研究): 豊臣大坂城本丸周辺の地下探査による復元研究—文理融合・博学連携プロジェクト— (研究代表者: 仁木宏教授)」が取り組まれている。

文学研究科内において, 専修・教室の枠を超えたメンバーの協働による将来性のある共同研究を開拓・推進するために, 公募により「研究科プロジェクト推進研究」を採用して助成を行っている。2016 年度までに完了した「釜山大学校韓国民族文化研究所と UCRC の共同研究プロジェクト (研究代表者: 佐賀朝教授)」は, 今後とも日韓機関間で継続する学術交流の基盤となることが予定され, また今年度新たに採択された 2 件のテーマはいずれも多分野間交流を促進するものであった。

- ①テーマ「日本文学を世界文学として読む」研究代表者: 山本真由子講師
- ②テーマ「大阪の地誌類に関する学際的研究」研究代表者: 菅原真弓教授。

さらに, 若手 UCRC 研究員による「都市文化研究プロジェクト」の募集も行い, 今年度は 3 つのプロジェクト

トを採択した。

- ①テーマ「都市における音楽文化の形成過程についての研究——心斎橋アメリカ村を事例に——」研究代表者: 柴台弘毅, 加藤賢
- ②テーマ「『ハーフ』コミュニティに関する社会学的研究——人種の混交現象, 都市の『語らい』の場, 多文化共生社会」研究代表者: ケイン樹里安
- ③テーマ「近代日本におけるドイツ系商会の経営と貿易——C. ローデ商会の伊予鉄道への機関車輸入について」研究代表者: 栢居宏枝

いずれも独自のフィールドワークにもとづく有意義なもので, その研究成果の一端 (テーマ①, ②) は, 大阪市立大学文学部・文学研究科オープンファカルティカルティ 2018 (2018 年 11 月 23 日グランフロント大阪にて開催) のフォーラム企画「第 2 回都市文化研究フォーラム: 若手研究者が考える, 都市と文化の〈現在〉」において一般にも開示される。また「第 3 回都市研究フォーラム (テーマ③)」も 2019 年 2 月 1 日に開催される。

研究成果発表媒体として, 雑誌『都市文化研究』および英文電子ジャーナル『UrbanScope』が引き続き発行されている。また市民への成果還元の一環として, 上方文化講座の開催と文学研究科叢書の出版が行われる。

2. 運営委員会

2018 年度 UCRC 運営委員会委員は以下の通りである。

文学研究科研究科長: 仁木宏教授 (日本史学)

文学研究科副研究科長: 小林直樹教授 (国語国文学)

所長: 佐賀朝教授 (日本史学)

副所長 (事務局長): 草生久嗣准教授 (西洋史学)

事務局: 石川優特任助教 (UCRC), 前田充洋 (スタッフ)

運営委員会委員: 大場茂明教授 (地理学), 佐金武准

教授 (哲学), 笹島秀晃准教授 (社会学), 長谷川健

一准教授 (ドイツ語・フランス語圏言語文化学) 以

上のほか, UCRC 研究員もスタッフとして研究活

動に参加しており, その活動は研究履歴と認められ

るものである。

●UCRC のホームページ

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/>

2017 年度 戦略的研究 (基盤研究) の活動

仁木宏 (文学研究科教授)

1. 研究課題

豊臣大坂城本丸・詰の丸の地下探査による復元研究—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ、計10名で構成。文学研究科3名（仁木、塚田、岸本）、理学研究科2名、大阪歴史博物館など市の研究機関3名、他大学1名、他府県の研究機関1名。

3. 研究目的・内容

豊臣期大坂城の本丸とその周辺については、江戸幕府大工頭中井家に伝わる「本丸図」がほぼ唯一の詳細な絵画資料である。しかし、中井図は17世紀の絵図であるため、誤差があることは避けられない。また石垣の高さ、城内の地表面の高低差などの情報も正確かはかりかねるところがある。こうした限界を克服するためには、サウンディング調査や表面波探査を、繰り返し広い範囲で実施することで、絵図の正確さやゆがみを測定するとともに、高低差の情報を収集するしかない。

本研究では、以上のような意図のもと、本丸詰ノ丸地区南端部ならびに本丸南側の現桜門付近の調査を実施し、その復元をめざした。サウンディング調査によって、豊臣期の石垣や地表面を検出し、平面上の位置を確定することで、この「本丸図」の正確さを確認する。あわせて海拔高度を測定し、石垣や豊臣期の地表面の高低差を測定し、豊臣期大坂城復元の一助とする。表面波探査では、地中の地質の違いから、地山や各段階の造成土層などを検出し、豊臣期の堀跡を探索する。

4. 研究経過

2017年7月に実施したサウンディング調査については、本誌先号で報告済み。

表面波探査は、2018年2月12日、現桜門の南側の土橋部分で実施した。この土橋は豊臣期の堀を埋めて設けられたと推定され、表面波探査によって堀の位置や形状を検知することを目指した。しかし、探査によって得られた地質構造はまったく均質的であり、地山や徳川期の埋め土を確認できず、豊臣期の堀の形状は明らかにできなかった。

数年来の調査成果を公開する催しとして、公立大学法人大阪市立大学・公益財団法人大阪市博物館協会包括連携協定企画、シンポジウム「秀吉の三都 聚楽・伏見・大坂」を、2018年1月8日、大阪市立大学田中記念館にて開催した。共同研究者の松尾信裕氏（大阪歴史博物館）、仁木などが報告した。

2018年度 戦略的研究（基盤研究）の活動

仁木宏（文学研究科教授）

1. 研究課題

豊臣大坂城本丸地区の堀・櫓台の復元研究 —地質調査にもとづく文理融合・博学連携プロジェクト—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ、計10名で構成。文学研究科3名（仁木、塚田、岸本）、理学研究科2名、大阪歴史博物館など市の研究機関3名、他大学1名、他府県の研究機関1名。

3. 研究目的・内容

本研究では、昨年度にひきつづき、現大坂城本丸広場においてサウンディング調査を実施するとともに、微動アレイ探査をはじめて実施した。

微動アレイ探査は、波浪・風・走行車両や工場などを源として生じた「常時微動」を利用し、表面波の位相速度を周波数ごとに解析し、地下のS波速度分布を得るものである。地震計と測定モジュールを一定範囲にならべることで、二次元・三次元で地下の構造を明らかにできる。二次元アレイ探査は、直線状に測定することで地下の「断面図」を作成する。三次元アレイ探査は、測定点を方形メッシュ状に配置することで三次元構造を明らかにするものである。サウンディング調査に比較すると精度は落ちるが、簡便で、二次元・三次元の評価ができる。大規模な堀であれば、位置や深さを知ることができるので、絵図や、これまでのサウンディング調査や発掘調査の成果と連動させることでより正確な構造解明が可能となる。

4. 研究経過

2018年7月21～22日、本丸広場にてサウンディング調査を行った。詰ノ丸南端の櫓台状施設、詰ノ丸と二ノ丸を結ぶ土橋状の構造物、上ノ段と中ノ段の間の石垣などの検出を試み、とりわけ上ノ段からその下部の石垣については詳細を把握することができた。

10月16日、本丸広場にて微動アレイ探査を実施した。結果はまだ報告されていない。

12月15日、公立大学法人大阪市立大学・公益財団法人大阪市博物館協会包括連携協定企画、シンポジウム「豊臣大坂城研究の最前線」を大阪歴史博物館にて開催し、一連の研究成果を公表する。共同研究者の三田村宗

樹氏（市大理学研究科），市川創氏（大阪府教育庁），仁木などが研究報告を行う。

国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業 （旧「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」）

佐賀朝（文学研究科教授，UCRC 所長）

1. 国際共同研究の概要

2017年度に「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」として採択された本事業は、JSPSによる事業再編・名称変更により2018年度から「国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業」となった。継続して研究課題「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」を掲げ、事業を精力的に推進している。

本事業は、アジア諸地域における周縁的社会集団が、ヨーロッパ帝国主義の下、近世から近代への過程でどのように変容したかを、「排除」と「包摂」の経験に焦点をあて、世界史的な視野で解明することを目的としている。日本の近世における周縁的社会集団に関する豊富な一次史料の存在と独自の社会構造分析の方法を活かして、欧米の日本史研究者や日本のアジア史研究者、さらにはサバルタン研究などの方法的蓄積がある欧米のアジア史研究者も加えた四者を架橋する形で新たな比較史と社会分析の方法的深化をはかり、多極的な近代移行期像の構築を目指すものである。

国際共同研究の方法として、従来型の個別セミナーやシンポジウム等だけでなく、若手派遣研究者の活動と海外連携先の研究者の招聘を軸として「史料・方法融合型セミナー」や「史料読解ワークショップ」など、新たなスタイルを採用し、実践する点にも特色がある。

研究期間は、2017～19年度の3年間である。

2. 研究組織

主担当研究者 塚田 孝（文学研究科教授）日本近世史
担当研究者

佐賀 朝（文学研究科教授）日本近現代史
井上 徹（文学研究科教授）中国近世・近代史
北村昌史（文学研究科教授）ドイツ近代史
草生久嗣（文学研究科准教授）ビザンツ帝国史
脇村孝平（経済学研究科教授）インド近現代経済史
安竹貴彦（法学研究科教授）日本近世近代法制史
森下 徹（山口大学教育学部教授）日本近世史
町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）

日本近世史

八木 滋（大阪歴史博物館主任学芸員）日本近世史
人見佐知子（近畿大学文芸学部准教授）日本近代史
若手派遣研究者

上野雅由樹（文学研究科准教授）オスマン帝国史
彭 浩（経済学研究科准教授）近世東アジア史
守田まどか（UCRC 研究員）オスマン帝国史
島崎未央（UCRC 研究員）日本近世史
吉元加奈美（UCRC 研究員）日本近世史
藤本大士氏（UCRC 研究員）日本近世・近代史

海外連携先

- ・イェール大学
ダニエル・ボツマン（同大学歴史学部教授，日本近世・近代史）ほか5名
- ・シンガポール国立大学（NUS）
ティモシー・エイモス（同大学人文社会科学部准教授，日本近世史）ほか3名
- ・ノースカロライナ大学シャーロット校
マーレン・エーラス（同校准教授，日本近世史）
- ・上海大学
張 智慧（同大学文學院歴史学部副教授，日本近代史）

3. 2018年1～12月の研究活動

初年度である2017年度の若手派遣研究者として公募を実施し採用した守田まどか氏（UCRC 研究員・オスマン帝国史）を1月からイェール大学に派遣したほか、2月からは上野雅由樹氏（文学研究科准教授・オスマン帝国史）、島崎未央氏（UCRC 研究員・日本近世史）を、それぞれ同じイェール大に派遣した（上野氏は4月にいったん帰国し、再度、9月末からイェール大に出発）。また2018年度の派遣としては、10月から彭浩氏（経済学研究科准教授・近世日中関係史）、12月から吉元加奈美氏（UCRC 研究員・日本近世史）を同じくイェール大に派遣した。

また2019年度の派遣者公募を11月に実施し、藤本大士氏（東京大学大学院，日本近世・近代史）の採用を決定した。

2018年1月以降のセミナー等の活動は以下の通り。

- ・1月11日 第3回セミナー（ボツマン氏・上野雅由樹氏，大阪市大）
- ・1月20・21日 近世大坂研との共催セミナー（大阪市大）
- ・3月3日 第4回セミナー（人見佐知子氏，大阪市大）
- ・3月19日 海外セミナー企画（イェール大）
- ・3月26・27日 第1回海外セミナー，第1回史料読解ワークショップ，部局間協定調印式（イェール大）
- ・4月26日 第5回セミナー（北村昌史氏，大阪市大）
- ・5月24日 第6回セミナー（彭浩氏，同上）
- ・7月12日 第7回セミナー（張智慧氏，同上）

- ・7月14日 第2回史料読解ワークショップ(同上)
- ・8月3日 第8回セミナー(島崎未央氏, 同上)
- ・9月1日 第9回セミナー(エーラス氏, 同上)
- ・9月26~29日 シンガポール国立大学(NUS)で国際シンポ「明治維新の再検討」開催。26日に本事業主催のラウンドテーブル(塚田氏・NUS研究者)も開催
- ・10月18日 第10回セミナー(ボツマン氏, 大阪市大)
- ・11月1日 第11回セミナー(ドリクスラー氏, 同上)
- ・11月15日 第12回セミナー(吉元加奈美氏, 同上)
- ・12月1・2日 上海社会科学院で国際シンポジウム「日中都市史の研究と比較」開催(共催企画)

以上のほか、2019年1月には第13回セミナー(大阪市大)を、同年3月にはイェール大学での海外セミナーと史料読解ワークショップを予定しており、5月にはイェール大・NUSの海外連携研究者を招いての国際シンポジウムを計画している。

なお、本事業のWEBサイトも2018年4月にオープンした(<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/MSGEM/>)。

2018年度 文学研究科プロジェクト 「日本文学を世界文学として読む」

山本真由子(文学研究科講師)

1. 研究の目的と概要

日本文学と外国文学との関わりは、古代における漢字の受容から始まり、現在は制作、享受など多方面にわたり広く世界におよんでいる。この密接な関わりをふまえ、日本文学作品については、比較文学研究、翻訳研究などが積み重ねられている。また、近年、比較文学研究では、ひとつの言語や国の文学として作品を読むのではなく、「世界文学」のひとつとして作品を読み、作品の普遍的な意味や価値が論じられるようになってきている。本研究では、日本文学を世界文学として多角的に考察し、詳しく正確に読み、加えて新たな研究方法、研究領域を探究する。その際、イリノイ大学との交流を、研究の一つの軸とすることにより、相互の研究で蓄積された知見を集約し、研究期間内に独自の成果を得ることを目指す。この研究によって、日本文学の世界文学における位置づけ、評価を検討し、作品の新たな価値を提示することを目標とする。

2. 研究組織

山本真由子(国語国文学)・高島葉子(表現文化学)・奥野久美子(国語国文学)・堀まどか(アジア都市文化

学)・大坪亮介(大阪市立大学非常勤講師)・永井泉(国語国文学, 院生)・劉娟(国語国文学, 院生)・Robert Tierney(イリノイ大学教授)・Gian Piero Persiani(イリノイ大学講師)

3. 研究経過・予定

2018年7月25日に、イリノイ大学からTierney氏、Persiani氏を迎えて、打ち合わせ会議を行い、研究の進め方を決定した。8月16日~18日には、Persiani氏の企画、運営でイリノイ大学で行われた和歌ワークショップにおいて、同氏、Tierney氏、山本が研究発表を行った。11月12日に第1回研究会(報告、永井・山本)を開催した。今後、1月と2月に研究会を行い、12月3日~25日には学術情報総合センター企画展示「日本文学を世界文学として読む」を予定している。

2018年度 文学研究科プロジェクト 「大阪の地誌類に関する学際的研究」

菅原真弓(文学研究科教授)

1. 研究の目的と概要

都市「大坂」は『摂津名所図会』(寛政8年/1796)など様々な地誌類に描き留められてきた。しかしこれら名所図会群については資料的価値のみが重視され、たとえば描かれた歴史的な名所を人文地理学から、また記された和歌を国文学から、あるいは挿絵に見る植生などについての建築学(都市計画)から、さらに加えて先に挙げた名所絵の出典特定を行う美術史学からの、単にそれぞれ個別分野における研究の題材として使用されてきた。

本研究では、幕末から明治期にかけて刊行された地誌類や大阪を描いた名所絵を、「大阪はどのように描かれているか」(美術史学)、「そこに蓄積された土地の記憶と現在」(地理学)、「描かれた江戸の旅」(観光学)という三つの異なる学問分野の研究者の異なる視点から検討を加える。また、これまで資料としてのみ扱われてきた地誌類を、多角的な角度からの検討によってその歴史的な意味、新しい価値を明らかにしていくこととする。

2. 研究組織

菅原真弓(アジア都市文化学)・大場茂明(地理学)・天野景太(アジア都市文化学)・松井恵麻(地理学, 院生)

3. 研究経過・予定

主にメールでの連絡による打ち合わせを行い、今後の

予定についての話し合いを持った。代表者菅原は本研究のテーマによる研究発表「浪花百景」研究～作品に見られる歌川広重学習を中心に～」（美術史学会西支部例会、9月15日、於・京都大学）を既に行っている。

11月以降、月に一度の研究会を実施し各自の研究発表を行い、これを取りまとめた形で年度末の3月31日（日）、大阪市立住まい情報センターとの共催によるシンポジウムを実施する予定である。

2018年度 都市文化研究プロジェクト 『「ハーフ」コミュニティに関する社会学的研究——人種の混交現象、都市の『語らい』の場、多文化共生社会』

ケイン樹里安（UCRC 研究員）

本研究は、「ハーフ」と名乗り、呼ばれる人々の問題含みの日常についての経験的研究を共同研究によって前進させること、そして、研究成果を社会に向けて積極的に発信する方途を探ることを目的とするプロジェクトである。調査研究では、「語らいの場」と呼びうる都市コミュニティへの参与観察、制度変遷や言説編成に関する資料収集、インタビューと写真誘出法による調査を共同研究者・下地ローレンス吉孝氏と共に実施した。研究発信では、WEBサイト HAFU TALK ハーフトーク (<https://www.hafutalk.com>) の共同代表セシリア久子氏と共に、サイト上での発信だけでなく、NHK『おはよう日本』（2018年11月3日放送）出演、そして11月23日（金祝）文学研究科オープンファカルティにおける報告会において実施した。研究成果は投稿論文および学術書に掲載される論考と、さらなる研究発信の機会の創出で進める予定である。

2018年度 都市文化研究プロジェクト中間報告 「都市における音楽文化の形成過程についての研究——心斎橋アメリカ村を事例に——」

柴台弘毅・加藤賢（UCRC 研究員）

本研究プロジェクトは、心斎橋アメリカ村（大阪府中央区）の「音楽の街」という側面に注目し、この形成過程を通史的・多角的に分析するものである。そして、当地の事例と他都市の事例とを比較することにより、東京

中心的に語られがちな「都市と音楽」の関係性を再考し、より一般的な理論モデルを構築することを目指す。研究活動は、当地の音楽文化や都市計画についての資料蒐集・文献調査、フィールドワーク、並びに関係者へのインタビュー調査を中心に行う。現在は在阪の放送局・音楽事務所の関係者、アメリカ村を拠点に活動する実演家へのインタビュー調査を重点的に進めており、複数の関係者からの証言を得ることができた。2018年11月23日に開催される『第2回都市文化研究フォーラム—若手研究者が考える、都市と文化の〈現在〉』（於グランフロント大阪）において、「都市の音楽文化を考える—心斎橋アメリカ村とレゲエを事例に」と題した研究報告会を行う。

2018年度 都市文化研究プロジェクト中間報告 「近代日本におけるドイツ系商会の経営と貿易—C. ローデ商会の伊予鉄道への機関車輸入について」

枡居宏枝（UCRC 研究員・ルール大ポーフム客員研究員）

本研究では、明治期の三大ドイツ系商会の一つであるC. ローデ商会（C. Rohde & Co.）の通商活動の実態について、鉄道資材の輸入に着目して明らかにしていく。

1888年に伊予鉄道は、ドイツのミュンヘンにあったクラウス（Krauss）社から最初の軽便鉄道用機関車を2両購入している。仲介したのは東京の刺賀商会で、その後横浜のC. ローデ商会を通じて車両の輸入が続いた。

これまでの先行研究・史料の収集および実地調査の結果、自社にドイツ人技術者ウィルヘルム・ハイゼ（Wilhelm Heise）を迎えていた刺賀商会は、C. ローデ商会と連携してドイツやイギリスからの建築資材の輸入を行っていたこと、そして伊予鉄道がドイツから資材を輸入するに至るまでの経緯が、人的ネットワークを中心に明らかになった。

今後は、ドイツの企業史料を閲覧するほか、ドイツの研究者とコンタクトをとり、研究を進展させていく予定である。

『都市文化研究』編集委員会

山祐嗣（文学研究科教授）

1. 2018 年度委員

平田茂樹（文学研究科教授，東洋史学）
 進藤雄三（文学研究科教授，社会学，編集主任）
 山 祐嗣（文学研究科教授，心理学，編集委員長）
 久堀裕朗（文学研究科教授，国語国文学）
 古賀哲夫（文学研究科准教授，英語英米文学）
 山崎雅人（文学研究科教授，言語応用学）
 菅原真弓（文学研究科教授，アジア都市文化学）

2017 年度と約半数が入れ替わり，編集委員長は岩本真理から山祐嗣に，編集主任は山祐嗣から進藤雄三に交代した。

2. 21 号出版状況

2018 年度は 21 号の編集を行った。研究論文 3 本，研究ノート 4 本，研究展望 1 本，翻訳 1 本，書評 4 本，海外レポート 1 本に加え，企画としての翻訳論文 1 本を掲載の予定である。

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

添田晴雄（文学研究科教授）

2017 年度編集の 9 号は，2017 年 2 月に開催された文学研究科プロジェクトの国際セミナー「環境史・環境誌の中の合同生活圏」に基づく特集論文 5 本（Introduction を含む）と文学研究科の専任教員の業績を「翻訳」とし

て 1 本掲載した。この号から，編集作業のほとんどを年度内に済ませるもの実際の発行は次年度初頭に次年度予算で行うという編集・発行周期に移行した。2018 年度編集の 10 号は，添田，佐金，佐伯，海老根が担当している。論文の部（現在査読中）と特集の部の 2 本立てで計画を進めている。特集論文の中に文学研究科専任教員の業績の「翻訳」が含まれているが，この翻訳については外部資金を利用した。温存した「翻訳」の予算枠は，特集企画の充実に充てることにしている。なお，11 号以降の「翻訳」枠の論文の募集要領を整備することにより，掲載翻訳論文の研究分野に偏りがないようにするための準備を現在行っている。

文学研究科叢書 編集委員会

草生久嗣（文学研究科准教授）

文学研究科叢書第 10 巻『文化接触のコンテキストとコンフリクト—EU 諸地域における環境・生活圏・都市』が刊行された（2018 年 9 月）。本書は，日本学術振興会頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」（平成 24～26 年度）の研究成果をもとに，国内外の研究者を招聘して開催された平成 27 年度大阪市立大学国際学術シンポジウム「文化接触のコンテキストとコンフリクト—EU 諸地域における環境・生活圏・都市」（平成 27 年 12 月 4～6 日）の内容を，発表者による寄稿ならびに当日の総合討論を含めてまとめたものである。13 名の執筆者を擁して解題記事 2 篇，パネル寄稿 7 篇，ディスカッション記録 1 篇を掲載する。編者は大場茂明（編集長），大黒俊二，草生久嗣。